『うつくしい生活』

作・渡山博崇

【登場人物】

グリム兄弟
ねずみ
ことり
ソーセージ
ソーセージ妹
豆
犬
雀
画家（デザイナー）
配達員
歯科医
資産家
警官
子供
弁護士
医師
看護師
旅人

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

幕前。
グリム兄弟がいる。なにやら執筆中の様子である。

グリム兄弟　（ふと気付いて）やあ。私はヴィルヘルム・カール・グリム。こちらは兄のヤーコプ・ルートヴィヒ・カール・グリム。よくグリム・ブラザーズって一括りにされるけど、気にしてない。今日はみなさんにキンダー・ウンド・ハウスメルヒェン作品番号２３番を紹介しようと思っている。みなさんよくご存じのように、我が美しく素晴らしきドイツにおける口伝えの昔話を集めた本だが、その中でも心残りのある作品だ。『鼠と小鳥とソーセージ』というタイトルで、その名の通り、鼠と小鳥とソーセージが出てくる。とても短い話なので読んで聞かせよう。

ここで、ことりとねずみとソーセージがぞろぞろとやってくる。

グリム兄弟　（手元の原稿を読む）むかしむかしドイツで、小鳥と鼠とソーセージが仲間同士になり、しあわせに暮らしていました。ひとつの家に住み、財産も増えました。小鳥の役目は森で薪を取ってくること、鼠の役目は水を汲み、火を点け、テーブルの支度をすること、ソーセージの役目は料理をすることでした。ところで、あまりしあわせだと、つい、なにか新しいことをやってみたくなるものです。

そこに大きな鍋があり、ことりは薪をくべ、ねずみは水を火にかけ、ソーセージは鍋に入る。雀がやってくる。

雀　お前、損してるよ。
ことり　え？　なんだい急に。
雀　お前ばかりが苦労して。
ことり　いや、私は今の生活に満足しているよ。
雀　気持ちのいい奴だな。（鼻で笑って）いい気なもんだ。
ことり　なんだい。
雀　ねずみは井戸で水を汲んだ後は火を点けるまでのんびりしてる。
ねずみ　いけないか。
雀　いやいや。ソーセージなんかあれ風呂に入ってるだけじゃないか。
ソーセージ　いやいや、これでソーセージの油とダシが出て、料理がうまく仕上がるんだ。
雀　それは気持ち悪いな。
ねずみ　気持ち悪くないよ。だってソーセージだぞ。
雀　ソーセージは友だちか、それとも食材なのか。
ねずみ　食材？　確かに食べられるけど、友だちだ。友だちだぞ。
雀　はっきりしろよ。
ねずみ　私はねずみだから、白黒つけないんだ。
ソーセージ　友だちだ。
雀　そこにお前が帰ってくる。重い荷物をどっさり抱えてな。まったくいい生活だ。

雀は去る。

ことり　やめようか。
ねずみ　なにを。
ことり　私はもう森に行かない。
ソーセージ　ええ？
ことり　こんな役目はもうごめんだ。君たちが私の仕事をやってみろと言うんだ。
グリム兄弟　鼠もソーセージも精いっぱい反対しましたが、小鳥はどうしても聞き入れません。仕方なく、くじを引いて、ソーセージが薪を取りに行き、鼠が料理をし、小鳥は水を汲みに行くことになりました。

ソーセージは出て行く。ねずみが料理をして、小鳥は水を鍋に満たしている。

ねずみ　遅いな。
ことり　薪がなけりゃ火を起こせない。
ねずみ　森で迷っているのかもしれない。

犬がやってくる。ソーセージを咥えている。

ねずみ　ソーセージ。
ことり　犬め、なんてことをしてくれた。
犬　だってこれは食材じゃないか。
ことり　私たちの友だちだ。
ねずみ　つまり私たちの食材だ。
ことり　それは泥棒だぞ。
犬　このソーセージはにせ手紙を持っていたんだ。殺されても仕方ない。

犬は去る。
ねずみは黙ってぐつぐつと煮え立つ鍋の中に入る。

ことり　にせ手紙ってなんだ。

豆がやってくる。

豆　こないだ戦争に負けただろ。あれはナポレオンがにせ手紙をばら撒いて、この国に裏切者がいるって王様に思わせたんだ。だからにせ手紙を持ってるものは、すぐに処刑されちまうんだ。
ことり　なんでソーセージがにせ手紙なんか。
豆　持っていても持っていなくても、わからないだろ。今となっては。
ことり　そんなの、あんまりだ。誰だ。

豆は去る。

ねずみ　生きていくしかないよ、私たちは。
ことり　ああ。これからは仲良くやろう。それがせめてもの、ソーセージへの贖罪だ。

ことりはテーブルの支度をする。
ねずみはその間に気絶し、鍋に浮かぶも、やがて沈む。

ことり　ねずみ。

ことりはねずみを探して、鍋を覗き込んだり、火のついた薪を掻き分けたりする。
火が家に燃え移り、火事になる。ことりは飛び出ていく。
水音。

グリム兄弟　こうしてソーセージは犬に殺され、鼠は鍋の中で煮えて溶けてしまい、小鳥は火を消そうと井戸に水を汲みにいきましたが、慌てて井戸に落ちて溺れ死んでしまいました。（原稿から目をはずして）……これで、おしまいだ。なんたる不条理か。ほとんどの昔話には教訓というものがある。この話の場合「うまく行っている役目を無理に変えても、同じようにうまくはいかない」といったところか。だが違う。この話を私たちは、１７世紀の作家モシェロシュによる『フィランダー・フォン・ジッテヴァルトの不可思議にして真実なる幻想』から採取した。そこから読み取れることは、「愚か者は死ぬ」だ。

ヴィルヘルム・グリムはヤーコプ・グリムに目をやる。

グリム兄弟　わかってる、兄さん。私たちは慈悲が必要だと考える。つまり、この作品の最期を書き換えようと思っている。なに、昔話を書き換えるのはこれが初めてってわけじゃない……ただ、もう教訓は必要ない。なんの教訓もない童話があってもいい。しあわせに暮らし、しあわせに終わる。そんな話があってもいい。

ヴィルヘルム・グリムは原稿の最後の頁を破る。
ねずみとことりとソーセージがぞろぞろと出てくる。

ソーセージ　奇跡だ。
グリム兄弟　よせ。私は神ではない。紙を破っただけだ。
ソーセージ　ははあ。
グリム兄弟　私たちは君たちのこの悲しい最後を書き直したい。どう思うかね。
ことり　私は、やり直したいです。
グリム兄弟　そうか。
ソーセージ　そんなことをして、いいんですか。
グリム兄弟　というと。

ソーセージ　時間は元に戻らない。
グリム兄弟　人生とはそういうものだ。しかし幸い君たちは人じゃない。
ねずみ　（ぎょっとして）ぎょっ。
ソーセージ　書き直すって、どんな話になるんでしょうか。
グリム兄弟　私たちは記述するだけだ。君たちの人生は君たちのもの、好きにすればいい。
ねずみ　人じゃなくても、人生ですか。
グリム兄弟　他に適当な言葉がなかった。
ことり　もう一度、やり直せるんですね。
ソーセージ　復活か。
ねずみ　復活だ。
グリム兄弟　そうだ。さあ、悲しみはしばし忘れ、笑うべき時には笑わなくてはならない。
復活の合図を出せ、いざ舞台の幕を開けよ。

幕が開き、舞台が姿を見せる。
森の近くにある村の、一軒家。
その中の部屋の様子がわかる。テーブル、３つの椅子。大きなベッド、３つの枕。
棚に並んだ皿や調味料の壺、不揃いな背表紙の本、編みかけの帽子と棒編み針。
３人の生活の様子がわかる室内。
音楽が鳴り響く。

オープニング・テーマ。

『僕らはみんな死んでないなら生きている』

♪　僕らはみんな　死んでないなら　生きている
♪　なんて空しい　なんて空しい　風が吹いてる
♪　僕らはみんな　死んでないなら　生きている
♪　すべて空しい　すべて空しい　風を追うように生きている
♪　むかしあったことは　これからもある
♪　むかし起こったことは　これからも起こる
♪　太陽の下　生きている
♪　新しいこと　なんもない

（間奏）

♪　僕らはみんな　死んでないなら　生きている
♪　なんて悲しい　なんて悲しい　風邪を引いてる
♪　僕らはみんな　死んでないなら　生きている
♪　すべて悲しい　すべて悲しい　風邪を引きつつ生きている
♪　かつてなかったことも　これからはある
♪　かつて起きなかったことも　これからは起こる
♪　月影の下　生きている
♪　わからないこと　多すぎる

（間奏）

♪　ことりだって　ねずみだって　ソーセージだって
♪　みんな　この先わからないけど
♪　友だちなんだ

春。
ランプが部屋の中を明るく照らしている。
ことりとねずみとソーセージはテーブルについている。
それぞれ、夕食後のタバコをふかしている。沈黙。

ことり　申し訳なかった。
ねずみ　もう終わったことだ。
ことり　だが森へ行くのはよせ。
ねずみ　森へなんか。（ソーセージに）行くのか？
ソーセージ　森はうつくしい。
ことり　それは私の役目だ。
ソーセージ　ひとりじめか。こうしよう。薪は取らない。
ねずみ　じゃあなんのために？
ソーセージ　いけないか？
ことり　いけないさ。わかってるんだろ、だから夜中にこっそりと出かける。
ソーセージ　邪魔されたくないだけだ。
ねずみ　いいじゃないか。森を散歩するくらい。
ことり　犬に食われてる。
ねずみ　なんだって？
ことり　犬に食われてるんだ。
ねずみ　しかし、生きてるだろ。
ソーセージ　やあ。
ことり　グリムさんがそう言うんだ。その度に書き直してるんだって。
ねずみ　つまり、劇的に復活したのに、また死んで、また復活したってことか。
ことり　４度だ。
ねずみ　４度も。
ソーセージ　やあ。
ことり　さすがに文句を言ってきたよ。
ねずみ　グリムが？
ことり　呼び捨てにするな。
ソーセージ　死ななければいいんだろ。
ことり　死ぬさ。
ソーセージ　決めつけるな。明日晴れるかだって私たちにはわからないんだ。
ねずみ　なぜ天気の話をするんだ。
ことり　西からの低気圧を南からの高気圧が押しのけるから明日は晴れだ。
ねずみ　なぜ天気の話をするんだ。
ソーセージ　それは偏西風の影響を無視してる。
ねずみ　なぜ天気の話をするんだ。しかもいやに詳しいじゃないか。
ことり　鳥は天気に詳しい。
ねずみ　なるほど。
ソーセージ　ソーセージはもっと天気に詳しい。
ねずみ　そこがわからない。
ソーセージ　今話すことじゃないな。
ことり　物事には原因と結果がある。ソーセージが森に行けば犬に食われる。単純な話だ。
ソーセージ　ことりだって食われる。
ことり　ことりは空を飛んで逃げる。ソーセージは食われる。
ソーセージ　それは、おいしいからだ。
ことり　……うん。
ねずみ　……うん。
ソーセージ　やあ。おいしくなければなあ。おいしくなければ森にだって行けるのに。

ねずみ　おいしいから料理係なんだろ。
ソーセージ　他の食材に味が染みるには朝から晩まで煮込まれなくちゃいけない。
ねずみ　ああ、だから夜中に出かけるのか。
ソーセージ　鍋の中で日がな一日を過ごすのがどんな気分かわかるか。
ことり　薪を拾うのだって大変なんだ。
ソーセージ　大変か大変じゃないかなんて話はしてない。私は一生鍋の中で過ごすのかってことだ。生き方の問題だ。
ねずみ　ことりみたいなこと言ってる。
ことり　君は役目を変えることに反対したじゃないか。
ソーセージ　いつの話をしてる。その私はもういない。
ねずみ　いっそ、ことりがそういうことを言い出したところから書き直してもらえば？
ことり　私が？
ねずみ　そう。もっとはじめから。そうしたらなにも起こらない。
ソーセージ　それじゃお話にならない。
ことり　そう。お話にならなければ、私たちは生きられない。
ねずみ　それは、悩ましいな。
ことり　そうか。これを乗りこえなくちゃいけないんだ。それが私たちの物語なんだ。
ねずみ　そうだ。みんなで力を合わせれば、乗り越えられるはずだ。
ソーセージ　私が問題か。君たちの物語の障害になってるのか。元の生活に戻りたいという君たちの欲求の障害になっていて、その葛藤がドラマを生むと、そういうことか。こっちはそんなこと考えて生きてないんだよ。
ことり　対立構造は物語の基本だけど、それをしているのはソーセージ、君だ。今、君は君たちと言ったね。私たちと君を、分けてしまったね。でもそれは違うんだ。私たちは長いこと一緒にやってきたじゃないか。だからこれは、君だけの問題じゃなくて、私たちみんなの問題なんだ。対立だけが物語じゃない。
ソーセージ　それもいつまでのことか。
ことり　どういう意味だ。
ねずみ　まさか、出て行くのか。
ソーセージ　そういうことも視野に入れている。
ことり　それこそ、お話にならない。
ソーセージ　いいや、そういうお話だってことだよ、その時は。
ねずみ　出て行きたいわけじゃないんだろ。
ソーセージ　わからない。答えは風の中にある。
ねずみ　だからなぜ天気の話をするんだ。
ソーセージ　これは天気の話か？　ふむ、天気の話かもしれん。
ことり　ねずみはどう思う。天気のことじゃない。
ねずみ　ソーセージは森に行くべきじゃない。
ソーセージ　グリムに怒られるからか。
ことり　さんを付けろ。
ねずみ　君が心配なんだ。何度も死ぬのは良くない。
ソーセージ　しかし、心が死んでしまう。
ねずみ　そこはうまいやり方があるはずだ。
ことり　本を読めばいい。どこかに行った気になれる。
ねずみ　なるほど。
ソーセージ　体を動かさないんじゃ、意味がない。
ねずみ　たしかに。
ことり　もっと大きい鍋を買ってやる。そこで泳げばいい。
ねずみ　いいぞ。
ソーセージ　地面に足をつけて歩きたいんだ。
ねずみ　それはそうだ。

ことり　家をでかくしよう。歩けるくらい。
ねずみ　発想がいい。
ソーセージ　私は、森を、歩きたいんだ。家の中は森じゃない。
ねずみ　真実はいつもひとつだな。
ことり　君はどっちの味方をするんだ。
ねずみ　白か黒か選ぶのは苦手だ。
ことり　そのねずみ色の脳細胞をもっとよく働かすんだな。
ソーセージ　大体、森を歩くだけのことがなぜそんなにいけないんだ。
ことり　犬に食われるからだ。
ソーセージ　犬に言え。
ねずみ　安全に歩ければ問題はないわけだ。
ソーセージ　というと？
ねずみ　みんなで歩けばいい。
ことり　なるほど。
ソーセージ　みんなで歩けばこわくない、と言うな。
ねずみ　そうだ。一緒に散歩するならみんな文句はないだろ。
ことり　私は早朝、薪を拾いに行くから、帰りは夕方になる。
ねずみ　私は朝から水を汲みにいく。テーブルの支度はそれからだ。
ソーセージ　水を沸かして料理にかかるから、夜までは鍋の中だ。
ことり　つまり夜か。夜は目が効かない。
ねずみ　私だって夜は編み物をしたり、ひとりの時間がないと生きていけない。
ソーセージ　待ってくれ。それじゃ薪を拾って帰るのが、夜更け過ぎになってしまう。さっきも言ったが、夜は目が見えない。
ことり　じゃあ早朝、太陽が昇る頃に出かけるか。それで午後までに戻れば、
ねずみ　それに朝は眠い。
ソーセージ　わがままを言うな。
ことり　元は君のわがままに付き合おうって話だろ。
ソーセージ　まだ付き合ってない。もういい、出て行く。
ねずみ　諦めるのが早すぎる。いい方法が、
ソーセージ　ない。そもそも君たちは私を理解していない。
ことり　気持ちは、わかってる。
ソーセージ　だったらなおさら罪が重い。わかってて自由にさせないんだからな。
ことり　罪が。
ねずみ　これまで通りでなにが悪いんだ。元の役目が一番私たちに合ってるじゃないか。
ソーセージ　鍋が嫌なんじゃない。外に出たいんだ。
ねずみ　だって、ひとりでどうするんだ。
ソーセージ　幸い蓄えがある。３人で分けても、これからを考える時間は作れるさ。
ことり　待て。待ってくれ。
ソーセージ　なんだ。
ことり　こうしよう。私は持って帰る薪を減らす。君は煮込まれる時間を減らす。
ソーセージ　それで。
ことり　お互い空いた時間で散歩に行こう。
ねずみ　生活が貧しくなるな。
ことり　生活は貧しくなるが、これで争いがなくなれば心が豊かになる。
ねずみ　それはそうだ。待て、私の仕事量は特に変わらないぞ。
ことり　後で考えよう。どうだ？

戸を叩く音。

ねずみ　誰だ、こんな夜更けに。

ねずみが戸を開けると、豆が立っている。

ねずみ　大家さん。
ことり　誰だって？
ねずみ　大家さんだ。
豆　お邪魔するよ。（入って）やれやれ、やっと会えた。
ことり　今立て込んでて。家賃の話なら明日まで待ってもらえますか。
豆　とんでもない。もう半年も貯まってるんだ。これ以上は待てないよ。
ねずみ　半年？
ことり　先月払った。
豆　あんたらは知らないんだろうけどね。あんたらが４度も書き直されてる間に、世間じゃ半年たってるんだ。
ねずみ　半年？
豆　半年だ。あんたらはいいさ。やり直しが効くんだからね。こっちはそうはいくもんか。あんたらが書き直されてる間だって、時間は止まらないんだからね。
ねずみ　なんだって半年も。
豆　さあ知らないね。グリムさんだってお仕事があるんだろうし、あんたらにかまけてるばっかりじゃないんだろうさ。さあさあ、払ってもらうよ。

ことりはしぶしぶ、棚から金袋を取り出す。豆はそれを奪うように取り、中身を覗く。

豆　これっぽっちかい。
ことり　半年分の家賃ならお釣りがくる。
豆　あいにく家賃は値上がりしたんだ。３カ月前にね。
ねずみ　横暴だ。
豆　いやなら出て行くんだね。
ねずみ　なんて豆だ、あんたは。
豆　そら豆だよ。足りない分はどうするか。よし、薪と、それからスープだ。ここにあるだけは全部もらっていくからね。それでも足らないくらいだ。
ことり　ちょっと、待ってください。それじゃうちの蓄えがなくなってしまう。
豆　それはあんたらの問題で、私の問題じゃない。
ねずみ　なんだって。
ことり　でも一度に持っていける量じゃない。明日、そちらに持っていきます。
豆　そんな心配はいい。従弟のジョンを呼んである。

戸から、ぬっと犬が現われる。ソーセージは身をこわばらせる。

ねずみ　犬だ。犬だぞ。
ことり　従弟だったのか。
豆　ジョン、持っていくんだ。

犬はソーセージを威嚇する。ソーセージはガタガタと震えだす。

豆　ジョン。はやくしろ。

犬はしぶしぶ部屋中の薪を担ぎ出す。

豆　明日まで待ってたら、いくらかくすねるつもりだったんだろう。お見通しだ。それに、また書き直されちゃ、しょうがないからね。

ことり　あんたの従弟のせいじゃないか。
豆　なに。ジョン、このソーセージを食ったのかい。まあいいさ、生きてるんだろ。せっかく拾った命なんだから、大事にしな。ジョン、なにしてるんだ。はやくしな。このスープも持っていくんだよ。
ねずみ　これは。
豆　もう夕食は済んだんだろ？（スープを味見して）うん、ダシが効いてるね。これなら売り物になるってわけさ。
ことり　売るのか。
豆　売るほどあるだろ。

犬が棚の本を指し示す。

豆　なんだ。これは本か。
ことり　やめろ、それに触るな。
豆　本てのは、高い値がつくんだってね。なにがいいんだか。
ことり　やめろ、手を離さないと、後悔するぞ。
豆　鳥が本なんか読んでんじゃないよ。
ことり　やめろ。手を離さないと、後悔するぞ。
豆　鳥のくせに、学者にでもなるつもりかい。
ことり　やめろ。手を離さないと、後悔するぞ。
豆　こうしようじゃないか。この本を渡すなら、スープは勘弁してやる。

ことりとねずみとソーセージは顔を見合わせる。

ねずみ　どう思う。
ソーセージ　鍋がないと料理できない。

ねずみとソーセージはことりを見る。

ことり　わかった。
豆　決まりだ。よかったなジョン、軽い荷物で。
ことり　（かっとなって）本は重いぞ。

犬がことりを睨む。

ことり　腰に気を付けろ。

豆と犬は去る。

ねずみ　財産が没収されてしまった。
ことり　また稼げばいいさ。朝も晩も働いて。
ソーセージ　散歩はどうするんだ。
ことり　まだそんなことを言うのか。
ソーセージ　耐えられないんだ、こんな生活。
ことり　だって……わかるだろ？
ねずみ　もう遅い。明日にしよう。

ねずみは早々にベッドにもぐりこむ。
ことりも明かりを消して、ねずみの横に寝そべる。
鍋を煮る薪の火だけが明るい。

ソーセージは台所にひとり佇む。

ねずみ　寝ないのか。

ソーセージは返事をしない。ことりが寝返りをうつ。
やがてソーセージは包丁を持って家を出る。

ねずみ　止めないのか。
ことり　ほっとけ。
ねずみ　またグリムに文句を言われるぞ。

やがて、鍋の火も消える頃、犬の首を持ったソーセージが帰ってきた。

ソーセージ　やってやった、やってやったぞ。
ねずみ　なんだ、うるさいな。
ソーセージ　私はやった。
ことり　なんだ、なんだ。

ねずみとことりは起きてランプの明かりをつける。

ねずみ　どうしたんだ、犬の首を取ったような顔して。
ことり　鬼の首だ。
ソーセージ　犬の首だ。

ソーセージは手にした犬の首を床に転がす。

ねずみ　（ぎょっとして）ぎょっ。
ことり　犬の首か。
ソーセージ　犬の首だ。
ねずみ　豆の従弟か。
ことり　ジョンとか言ったな。
ねずみ　どうするんだ。
ソーセージ　私は自由だ。

戸を叩く音が響く。

ことり　静かに。

戸を叩く音が響く。

ねずみ　誰だ。
ことり　しっ。
ソーセージ　私は逃げも隠れもしない。
ことり　いいから静かに。

戸を叩く音が響く。

男の声　すみません、どなたかいらっしゃいませんか。
ねずみ　居留守か。
男の声　まあその、いますよね、明るいんだから。

ソーセージ　いるのをわかってる。
男の声　旅の者です。一晩泊めていただけないでしょうか。
ねずみ　どうする。
ことり　こんな夜更けにお困りでしょう。
男の声　はい。
ことり　あいにくここには寝る場所がありません。ご遠慮ください。
男の声　納屋でもいいんです。
ことり　納屋はありません。
男の声　土間でも台所でもいいんです。春になったとはいえ、夜は冷えて辛いんです。
ねずみ　困っているな。
男の声　困っています。
ねずみ　聞こえるのか。
男の声　よく聞こえます。
ねずみ　どうする。
男の声　犬小屋でもいいんです。
ソーセージ　犬なんかいない。
男の声　すみません、犬の匂いがしたもんですから。
ことり　入れてやろう。
ソーセージ　どうして。
ことり　犬の匂いがするなんて触れ回られたら、やっかいだ。
ねずみ　それを隠せ。

ソーセージは犬の首を鍋に入れる。ねずみはそれを目にしたが、ことりは気付かない。
ことりが戸を開ける。旅人が中に入ってくる。

旅人　こんばんは。
ことり　こんばんは。
ねずみ　おや、人間だ。めずらしい。
旅人　ええ、こんな山奥ですから、ええ、そうでしょうね。
ことり　腹が減ってるならスープを温めましょう。
旅人　これはどうも、では遠慮なく。ソーセージですか。
ソーセージ　ええ。

ソーセージは鍋を火にかけて、時折浮いてくる犬の首を木ベラで沈める。

旅人　あの、トイレ貸してもらえます？

ねずみは旅人にシャベルを渡す。

旅人　え？
ねずみ　埋めるんだ。匂いで獣が来る。
旅人　え、ここで？
ねずみ　外で。
旅人　外。あ、外。
ことり　ええ、外。
旅人　野グソかあ。いいや、我慢しよ。
ねずみ　いいのか。
旅人　いいんですいいんです。人間なんてね、所詮クソ袋なんですから。
ソーセージ　クソ袋。
旅人　そう、僕クソ袋、あなた肉袋。あれ、おもしろくなかったですか。

ソーセージ　人間はみんなこんなか。
旅人　いえいえ。久々に人に、まあ人に会ったもので、少し高揚してるんです。
ことり　旅をしてるんですね。
旅人　ええまあ。見聞を広げたくてね。
ねずみ　どうですか、世の中は。
旅人　ひどいもんですよ。どこ行っても争いばっかりで。
ねずみ　やっぱり、うちが一番だ。
ことり　人間の村は遠いんでしょうね。
旅人　いやまあ、人間なんてあちこちにいますからね。
ことり　ここらじゃあまり見ないんです。
旅人　ああ。でももうすぐ、よく見かけるようになるんじゃないかな。
ねずみ　へえ。
旅人　ダムが出来てね。
ことり　ダム。
旅人　ええダム。そうしたら向こうの、ええとなんて川だっけ。ほら、すごく流れの激しい。そのなんとか川にダムが出来たものだから、流れがゆっくりになってね。川を渡れるようになったんですよ。川を挟んで東と西の町が行き来できるようになったから、人間も増えるんじゃないかと思うんですね。
ことり　へえ。
旅人　僕は舟で渡ったんですけど、もう橋を作ってましたからね。

ソーセージは椀に入れたスープを旅人に差し出す。

旅人　これはどうも。（飲んで）いやあ温まるなあ。

旅人はお腹をさする。腹具合は良くないようだ。
ソーセージはニヤニヤする。ことりはそれを見て不思議そうにし、ねずみは目をそらす。

ことり　旅人も増えるでしょうね。
旅人　そうでしょうね。
ねずみ　この村に宿があったら儲かるかな。
ことり　隣村にあるだろう。
ねずみ　ああ、そうか。
旅人　隣村、というのはあれかな。あれならダムに沈みましたよ。
ねずみ　ああ、ダムに。
ソーセージ　（ねずみに小声で）ダムってなんだ。
ねずみ　（ソーセージに小声で）ダムのことだろ。
ことり　隣村の住人はどこに？
旅人　さあ。わずかばかりのお金をもらって、町にでも行ったんじゃないですかね。

戸を叩く音。
ソーセージは包丁に飛びつく。

雀の声　すみません、一晩泊めてもらえませんか。
ことり　雀だ。
ねずみ　あいつか、君をそそのかした。
雀の声　村がダムに沈んでしまって、行くところがないんです。
ことり　帰れ。
雀の声　聞いてました？　帰るところがないんです。お腹もすいて倒れそうなんです。
ことり　帰れ。帰らないと、ひどいぞ。

ソーセージが戸を開けて、雀を追い立てる。ソーセージの奇声と雀の悲鳴。

ねずみ　あいつ、無敵だな。

旅人　昔々、東の大国に劉玄徳という人が居ましてね、諸葛孔明という先生を訪ねたときのエピソードに三顧の礼というのがあるんです。ご興味ないようだから手短に言うと、３回ノックすれば大体の戸は開くという話なんですよ。それをあの人が知ってればね。

ソーセージが戻ってくる。

ことり　知っていればどうなんです。

旅人　昔話ってのは、大体３回くり返すんです。

ことり　３回以上くり返す話は？

旅人　３回以上くり返す話はどういうわけか悲劇が多いですね。悲惨な最期が。

旅人はおもむろにシャベルを手に取り、外に出て行く。

ことりとねずみとソーセージはそれを見送って、戸に鍵をかける。

外から、旅人の声。

旅人の声　あの雀なら、そう心配することもないでしょう。

ことり　そうかな。

ねずみ　あいつ、家の前で。

旅人の声　しばらくするとこの村も道が整備されるはずですから。

ことり　道？

ソーセージ　何の話だ。

旅人の声　ええ。大きくて長い道が東と西を繋ぐんです。人が行ったり来たりして、ここも賑やかになるでしょうね。人が増えたら物も増えるんです。物資の輸送ルートになったら、街道沿いの村は物流の中継地点として大きく栄えるでしょう。宿が出来たり、商人が集まったり。その人たちの用事を満たすために職人が来たり、更にその人たちにサービスする酒場や飲食店が次々と出来たり、要は仕事には困らないだろうってことですよ。時が経てば、この村の人口も膨れ上がって、村は町へと姿を変えるでしょう。山は削られ、多くの木々が切られ、そうしたら、この森も消えるでしょうね。

ことりとねずみとソーセージは眠気を覚え、旅人の話を聞きながら、眠りにつく。

シャベルの土を掘る音が子守唄のように遠く聞こえる……。

グリム兄弟が家の外にいる。

グリム兄弟　やあ。ヴィルヘルム・グリムだ。（ヤーコプを見て）兄も元気だ。ソーセージが犬を殺してしまったので、どうしようかと思ったが、そのまま書き続けることにした。あれから森の散歩は叶ったが、ソーセージはまだ不満げだった。しかしそれも時間の問題だろう、時が経てばみんなの仲も元通りになるだろうと踏んでいたのだが、時が過ぎたことで問題が起こった。村の人口が膨れ上がって、山は削られ、多くの木々が切り開かれ、そうして、森が消えた。

グリム兄弟が話している間に、部屋の内装が変わる。

水道の蛇口とシンクが取り付けられ、天井から電灯がぶら下がっている。

テーブルにビニルクロスがかかり、壁には絵が掛けられており、棚には本がない。

新しい生活の様子。

秋。

グリム兄弟　森の恵みを失って、ねずみとことりとソーセージは、町の一員として、経済をまわすために手に職をつけることになった。

ねずみは夜の酒場で歌っている。
ことりはローラースケートを履き、トレイと伝票を構えて走り回っている。
ソーセージは椅子にしなだれてポーズ研究に忙しい。

グリム兄弟　なにをやっているんだ。全員集合だ。

グリム兄弟に呼ばれて、部屋の中に集まる。おのおの、椅子に腰かけて。

グリム兄弟　元気そうだな。
ソーセージ　ええ、まあ。
ことり　はい、おかげさまで。
グリム兄弟　なにをしてるんだ。
ソーセージ　モデルです。
ことり　コーヒーショップでウェイトレスを。
グリム兄弟　薪拾いはどうした。
ことり　それはだって、森がなくなったし、それに。
グリム兄弟　ちょっと待て、モデル？
ソーセージ　モデルです。隣に画家が引っ越してきたので、それで。
グリム兄弟　料理はどうした。君が煮込まれてこそだろ。

戸を叩く音。配達員がガスレンジを持って入ってくる。

ソーセージ　やあ。待っていたよ。こっちだ。
グリム兄弟　なんだこれは。
ソーセージ　このガスレンジだと大きな鍋が乗らない。あの鍋じゃないと私は入らない。
グリム兄弟　（見て）最新式だ。
ソーセージ　（誇らしげに）ええ。
ことり　だから薪はもういらないんです。
グリム兄弟　昔話だぞ。
ことり　はあ。

ことりが伝票にサインをすると配達員は去る。

グリム兄弟　ガスレンジに、水道まであるのか。これのどこが昔話だ。
ソーセージ　時代の波に乗ったんです。
グリム兄弟　乗らなくていいんだ。なに時代に合わせて近代化してるんだ。
ソーセージ　それ私たちのせいですか。
グリム兄弟　なんだつやつやしてるな。
ソーセージ　わかりますか。最近、料理してないんです。
ことり　煮込まれなくなってから、油がまわってるみたいで。
ソーセージ　もうモテてモテて。
グリム兄弟　それでモデルか。
ソーセージ　自分で言うのもなんですが美人画として結構売れてるようです。

グリム兄弟は壁にかかった絵に目をやる。ソーセージの姿が描かれた一枚だ。

ソーセージ　あれは「真珠の耳飾りのソーセージ」です。

グリム兄弟　もういい。（ねずみに）何故さっきから黙ってるんだ。
ことり　最近、元気がないんです。
ねずみ　仕事のことでちょっと。
ことり　歯が出てるんです。
グリム兄弟　なにが問題だ。鼠は前歯が出てるものだろ。
ねずみ　出っ歯は醜いから、舞台に立つなって。

ねずみは泣き出す。

ことり　気にしなくていいよ、そんな客。
グリム兄弟　舞台だと。
ことり　酒場で歌ってるんです。
グリム兄弟　どうしてそうなった。
ねずみ　明るいところが苦手で。水道があるから、私も余所で働かなきゃいけなくて、でも昼間の町も夜の町も明るくて、薄暗いところを探して辿り着いたのが。
ことり　酒場です。
グリム兄弟　皿とかグラスを磨いたらどうだ。
ねずみ　洗い場にいると、鼠と間違われて叩かれるんです。ねずみですけど。
グリム兄弟　飲食店に不向きだな。
ことり　前はそれで倉庫番をクビに。
グリム兄弟　歯を抜けばいい。
ねずみ　（ぎょっとして）ぎょっ。
ことり　正気ですか。
ねずみ　抜いたら、ここは空洞ですよ。
ソーセージ　そうだ、歯医者というのがいるらしいぞ。
ねずみ　歯医者？
ソーセージ　歯の医者だ。
ねずみ　歯なんて、床屋が力任せに抜くもんだろ？
ことり　時代は変わったんだ。
ソーセージ　時代の波に乗るんだな。
ねずみ　親にもらった歯だぞ。
ソーセージ　血筋じゃなく、歌手としての自分にこだわった方がいい。
ねずみ　前歯のない歌手は、ありなのだろうか。
ソーセージ　噂じゃ禿の女歌手だっているらしい。
ことり　どう思いますか。
グリム兄弟　それで問題がなくなるなら、いいんじゃないか。
ねずみ　そうですか。
ことり　グリムさんもこう言ってるんだし。
ねずみ　しかし。

話が長引く気配を察して、ソーセージは水道から鍋に水を入れ、ガスレンジで火にかける。
更に棚からソーセージなどを取り出し、刻んで鍋に入れるなどする。

グリム兄弟　なんだ、これは。
ことり　なんだと言われても。
ソーセージ　最新式のガスレンジです。
グリム兄弟　ああそうか。便利か？
ソーセージ　便利ですよ。
ことり　薪も拾わなくていいし。
ねずみ　水も汲まなくていい。

ソーセージ　なにより空いた時間でより豊かな生活ができるんです。
グリム兄弟　やっぱり、これはだめだ。
ことり　何故です。
ソーセージ　時間は進んでるんです、私たちだって前に進まないと。
グリム兄弟　これは昔話、おとぎ話なんだ。おとぎの世界にガスレンジ入れるんじゃない。
ことり　でも、どうすれば。
グリム兄弟　焚火で鍋を煮るんだ。今まで通りに。
ソーセージ　今どき、部屋で焚火なんかできませんよ。
ねずみ　大家さんに追い出されてしまいます。
ことり　大家さんの手配でガスも水道も引いたんです。
ソーセージ　大家さんに言ってください。
グリム兄弟　もうすっかり仲直りしたのか。
ことり　ええ。
ねずみ　生活時間が合わなくて、あまり顔を合わせないので喧嘩にならないんです。
ソーセージ　快適です。
グリム兄弟　書き直す。
ことり　ちょっと、待ってください。何故です。
グリム兄弟　こんなのは認められない。
ソーセージ　私たちはしあわせに暮らしているのだから、なにも問題ないはずだ。
グリム兄弟　こんなの、うつくしくない。これは昔話だ。おとぎ話だ。童話だ。メルヘンだ。
それをなんだと思ってるんだ。なんでウェイトレスがローラースケート履いてるんだ。フィフティーズ・アメリカンか。この絵はなんだフェルメールの真似か。オランダ黄金時代か。
（ねずみに）その眉毛はなんだ、エディット・ピアフか。酒場でシャンソン歌ってるのか。
時代がバラバラだ。それにここはドイツだ。ドイツだ。ドイツらしくするんだ。
ことり　ちょっとなに言ってるかわかりません。
グリム兄弟　失礼。私としたことがヒットラーのように声を荒げてしまった。
ねずみ　（ソーセージに小声で）誰だって？
ソーセージ　（ねずみに小声で）虎だ。
ことり　あの、私ウェイトレスやってますけど、本当は作家を目指してるんです。
グリム兄弟　作家だと？
ことり　はい。あの、私もグリムさんのように人の心を打つ物語を書きたくて。
グリム兄弟　（部屋を見渡して）諦めろ。本を読まないやつに本が書けるわけがない。
ことり　……。
グリム兄弟　薪を拾ってくるんだ。
ことり　もう使い道が。
グリム兄弟　そんなのはどうでもいい。森へ行くんだ。
ことり　もう森は。
グリム兄弟　薪を拾い、水を汲んで、料理をする。これが君たちの本来の生活だ。これだけはどうしたって守ってもらう。時々、見に来るからな。ちゃんとしないのなら、書き直しだ。

グリム兄弟は一方的にまくしたてると、戸を開けて出て行く。

ソーセージ　やっていられない。
ねずみ　まったくだ。
ソーセージ　ガスレンジにあの大鍋が乗るもんか。それにまた煮込んだら肌ツヤがなくなってモデルをクビになってしまう。
ねずみ　水道のない暮らしなんて考えられない。そもそも井戸だってもうないんだぞ。
ことり　でも、グリムさんが言うんだ。
ソーセージ　いつまでもグリムの言いなりになるべきじゃない。
ことり　でも。

ソーセージ　今の生活が嫌なのか。
ことり　そんなわけない。
ねずみ　いや、ばれなきゃいいんだ。
ソーセージ　というと。
ねずみ　料理してる姿を見せる必要はないだろ。同じ味を再現するんだ。
ソーセージ　なるほど。ねずみだって、テーブルの支度さえきちんとすればわかりっこない。
ねずみ　そうだ。ことりも薪を買ってこればいいんだ。なに、町にはなんだって売ってる。
ことり　でも。
ねずみ　だって今更他の仕事なんか。
ソーセージ　今だってみんなの稼ぎで家賃を払うのがやっとなんだ。せっかくうまくいってるのを、グリムに合わないからって台無しにするなんて間違ってる。
ねずみ　そうだ。
ことり　そうだけど、グリムさんは私たちの恩人じゃないか。
ねずみ　それは、そうだけど。
ソーセージ　なんだ、ねずみ。それでいいのか。
ねずみ　それは、よくないけど。
ことり　私は森へ行くよ。でも君たちは好きにしたらいい。
ねずみ　いいのか。
ことり　いいよ。私たちが仲良く暮らせることが一番だ。
ソーセージ　そうさ。そして、よりよく暮らすんだ。
ねずみ　よし。

ねずみは決然として戸を開けて出て行く。

ソーセージ　（ねずみに）朝ごはんは。
ことり　私も行くよ。森は遠いから、早く出ないと。
ソーセージ　朝ごはんくらい。
ことり　そうだな。

戸をノックする音。画家が入ってくる。

画家　いいかな。
ソーセージ　いいけど。（ことりに）いいかな。
ことり　ええ、もちろん。

ことりは鏡を覗き込み、そっと身だしなみを整える。
ソーセージは皿にスープを注いで、食卓に置く。

画家　お、朝メシか。いいかな。
ソーセージ　いいけど。恋人に作ってもらえよ。
画家　グレーテルは出て行った。
ソーセージ　ハンナは？
画家　あいつは料理なんか。
ソーセージ　テレーゼはできるだろう。
画家　朝弱いんだよ、彼女。
ソーセージ　なら自分で作れ。
画家　いいだろ、朝メシくらい。
ソーセージ　絵描きがモデルにたかるんじゃない。
画家　絵描きは貧しいって決まってるんだ。
ソーセージ　女はとっかえひっかえするくせに。

画家　女性は天が遣わしたんだ。魂を救済するために。
ソーセージ　他の人のためにな。あんたがそれを横からかっさらってるんだ。
画家　こいつは容赦がない。ことりちゃん、よくこんなのと暮らせるな。
ことり　森へ行かなくては。

ことりは戸を開けて出て行く。

画家　森？
ソーセージ　森。

ねずみは歯医者に来ている。

歯医者　悪い歯は抜かなくてはいけませんが、これは悪くもなんともない。
ねずみ　私の心に悪さをするんです。
歯医者　なるほど。気に入らないんですね。
ねずみ　言ってしまえば、そうです。
歯医者　では歯を削り、矯正をします。歯並びはぐっと良くなりますよ。
ねずみ　痛くありませんか。
歯医者　痛いです。
ねずみ　痛いのか。

歯医者はヤスリでねずみの歯を削る。

ねずみ　あばばばばばば。
歯医者　静かに。

歯医者は針金でねずみの歯を固定する。

ねずみ　あばばばばばば。
歯医者　静かに。鼠は前歯が伸びるのが早いので、定期的に来てください。受付で予約を。

歯医者に鏡を見せられて、前歯のない自分に驚く。

ねずみ　これが、私。

食事は終わり、食器はすっかり片付けられている。
ソーセージは包丁を握りしめている。

画家　どうして包丁を持ってるんだ。
ソーセージ　どうしてだろう。
画家　しまえよ。さあ、仕事だ。

ソーセージは包丁をしまう。
画家とソーセージは戸を開けて出て行く。
ねずみはふらふらと歩いて酒場にたどりつき、ステージで歌う。
ねずみがステージを降りると、資産家がねずみに寄り添う。

資産家　素敵な歌声だ。
ねずみ　ありがとう。
資産家　君のようなうつくしい鼠は見たことがない。

ねずみ　お上手なのね。
資産家　お世辞は言わないんだ。
資産家はねずみの手を取り、指に大きな宝石の付いた指輪をはめる。
資産家　これは君にこそ相応しい。
ねずみ　まあ。生まれ変わった気分だわ。
ねずみはキラキラした宝石をじっと見つめている。
資産家はねずみの肩を抱いて、一緒に去る。
ことりが帰宅している。
ややして、ソーセージも帰ってくる。

ことり　やあ。
ソーセージ　疲れてるのか。
ことり　森が見つからないんだ。
ソーセージ　まさか。
ことり　もっと遠くに行かないといけない。
ソーセージ　やめてもいいんだぞ。
ことり　いや。店にはしばらく休むと。
ソーセージ　そこまでしなくても。
ことり　誰かがグリムさんに報いなくては。
ソーセージ　責めてるのか。
ことり　誤解しないでくれ。私は、この生活を守りたいだけなんだ。
ソーセージ　そうか。

沈黙。ソーセージがことりの肩に触れようとした時、ねずみが帰ってくる。
ねずみは全身を高価な装飾で彩られている。

ねずみ　みんな。もう金の心配はいらない。
ソーセージ　どうしたんだ。
ねずみ　羽振りのいい金持ちがパトロンについたんだ。
ソーセージ　その歯。やったのか。
ねずみ　削ったんだ。でも何度か通わないと元通りになるって。
ことり　痛かっただろうに。
ねずみ　なんてことない。だって世界が違って見えるよ。光り輝いている。

ねずみは袋から金貨や紙幣をテーブルの上にあける。
ことりとソーセージは、あっと驚いた。

ねずみ　みんな私にこう言うんだ。ねずみよねずみよねずみさん、ちょっくらゴールドをくださいな。そうすりゃたちまちに、この袋が金を吐きだしてくれるぞ。いくらでもだ。
ソーセージ　それは、すごいな。
ねずみ　ソーセージ、君はもうあの男の前で裸にならなくて済むんだ。
ソーセージ　……。
ことり　……。
ねずみ　ことりも働かなくていいぞ。好きなだけ本を読んで小説を書くといい。
ことり　なら、森へ行くよ。
ねずみ　グリムの言うことなんか。
ことり　また書き直されたらどうするんだ。

ねずみ　それは困る。わかった。行けよ、さあ。
ソーセージ　今帰ったばかりなんだ。少し休ませてやれ。
ねずみ　グリムがいつ来るかわからないだろ。さあ、この金はやるから。
ことり　金のためにやるんじゃない。
ねずみ　そう邪険にするなよ。これから家賃の心配をしなくていいんだぞ。誰のおかげだ。
金だ。金をくれる金持ちだ。金持ちをとろけさす、私だ。
ソーセージ　調子に乗るな。
ねずみ　いいだろ。これまで生きてきて一度だって調子に乗れなかった。取り戻すんだ。
ことり　行ってくる。

ことりは戸を開けて出て行く。

ねずみ　行けばいいんだよ、まったく。
ソーセージ　ことりにひどいことを言うな。
ねずみ　なんだよ。褒めてくれたっていいだろ。私は役に立ったじゃないか。
ソーセージ　そういうことじゃなくて。
ねずみ　君たちはいつも威張ってた。役に立つやつは威張っていいんだろ。

ソーセージは包丁を無意識に手元に引き寄せている。
自らそれに気付くと、はっとしたように布巾で包丁をくるみ、ポケットにしまう。

ソーセージ　ちょっと出てくる。

ソーセージは戸を開けて出て行く。
ねずみは黙ってそれを見送る。そして装飾品をはずして、床に叩きつける。
電話のベルが鳴る。部屋の隅に電話があったのだ。ねずみは受話器を取る。

ねずみ　ええ。今帰ったところ。そう……待って。いいわ。

ねずみは受話器を置くと、装飾品を再び身につけて、戸を開けて出て行く。
暗い室内。
そこにグリム兄弟がやってくる。

グリム兄弟　誰もいないのか。

グリム兄弟は椅子に腰掛ける。

グリム兄弟　くそ。一体どこで間違った。一体何が悪いんだ。

戸が開き、ソーセージが帰ってくる。
暗闇の中で佇むグリム兄弟に気付き、驚いて声をあげ、その拍子に包丁を取り落とす。

グリム兄弟　何をしている。
ソーセージ　グリムさんか。
グリム兄弟　ことりはどうした。
ソーセージ　森へ薪拾いに。
グリム兄弟　ねずみは。
ソーセージ　知らない。
グリム兄弟　（包丁を拾い）これはなんだ。
ソーセージ　なんでもない。

ソーセージは包丁を取り返そうとするが、グリム兄弟は渡さない。

グリム兄弟　お前、まさか。
ソーセージ　夜の町を散歩してるだけさ。
グリム兄弟　刃物を持ってか。
ソーセージ　なにもやってない。
グリム兄弟　ことりはどうした。
ソーセージ　森へ行ったって言ったろ。
グリム兄弟　ねずみは。
ソーセージ　知らないって。
グリム兄弟　殺したのか。
ソーセージ　ちょっと喧嘩しただけで殺すわけないだろ。
グリム兄弟　本当なんだな。
ソーセージ　思っただけだ。いつも……いつも思うだけなんだ。
グリム兄弟　いつも？
ソーセージ　あの時が、あの瞬間が人生のピークだったなんて、私だって認めたくない。
グリム兄弟　……なんてことだ。書き直すぞ。
ソーセージ　死んだ犬は戻らないんだ。私だって戻らない。
グリム兄弟　なあ。なにが悪いんだ。どこでなにを間違えた。
ソーセージ　ねずみが金持ちになった。
グリム兄弟　どこがいけない。
ソーセージ　みんなで助け合わなくったっていいんだ。ねずみが金を稼いで、あとは愉快に暮らそうって。でもそんなこと出来るか。誰かに頼り切った生活なんて、ごめんだよ。
グリム兄弟　それでねずみを殺すのか。
ソーセージ　そんなわけないだろ。友だちだ。なあ、書き直してくれないか。
グリム兄弟　なに？
ソーセージ　ねずみの歯が削られるちょっと前でいいんだ。やり直したい。
グリム兄弟　ねずみを止められるのか。
ソーセージ　やってみるさ。なあお願いだ。
グリム兄弟　……それより歯医者を殺せ。
ソーセージ　え？
グリム兄弟　そいつがいなくなれば、また元通りだ。
ソーセージ　確かに、また歯が伸びるって言ってた。
グリム兄弟　そうだろ。
ソーセージ　いいのか。
グリム兄弟　他のやつらなど知ったことか。

グリム兄弟は包丁をソーセージに渡す。

グリム兄弟　いいか。しあわせになるんだぞ。
ソーセージ　ああ、ああ。なるとも。

ソーセージは包丁を手にして、戸を開けて出て行く。

グリム兄弟　（ヤーコプを見て）兄さんは黙っていてくれないか。仕方がないんだ。

窓に、歯医者に向かって包丁を振り下ろすソーセージのシルエット。
グリム兄弟は去る。
酒場では、すっかり歯が伸びたねずみが歌っている。それを見た資産家は悪態をついて去る。

ねずみは帰宅してベッドに倒れるようにして泣く。
ソーセージがそれを背中で迎えながら、料理をしている。

ソーセージ　よし、うまくできたぞ。食べてみろ、昔と同じ味だ。
ねずみ　近頃、元気だな。
ソーセージ　そうか？
ねずみ　ああ、ちきしょう、歯が痛む。
ソーセージ　前より伸びてるんじゃないか。
ねずみ　ことりはまだ帰らないのか。

戸を叩く音。

ソーセージ　噂をすればだ。

戸を開けると、画家が入ってくる。

画家　いいかな。
ソーセージ　いいけど。（ねずみに）いいかな。
ねずみ　好きにしろよ。
画家　お、朝メシか。いいかな。
ソーセージ　狙ってきたんだろう。
画家　悪いね。
ソーセージ　ねずみも食べろよ。
ねずみ　歯が痛いって言ってるだろ。
ソーセージ　怒鳴るな。悪かったよ。
ねずみ　スープなんか。もっと歯が削れるくらい固いものはないの。
ソーセージ　痛いんだろう。
画家　気の毒に。
ねずみ　残された患者はどうすればいいんだ。
画家　町中の歯医者が殺されるなんてな。歯医者連続殺人事件の思わぬ被害者だ。
ねずみ　このままじゃ私は人生の敗者だ。
ソーセージ　ほう。
画家　また歯がよくなったら、一枚描いてやるよ。
ねずみ　歯がよくなったら？
画家　ああ。元気出せよ。な？
ねずみ　歯がよくなったら？
画家　えらい美人なんだろ、歯があれなら。
ねずみ　そうだよ。歯さえなんとかなったらな。

ねずみは壁に掛けてある絵を齧り出す。

画家　なにするんだ。絵が削れる。
ねずみ　削っているのはあんたの絵だけど、削れてるのは私の歯なんだ。
画家　なに言ってるんだ。魂を削って描いた、俺の絵だ。
ねずみ　歯は私のだ。
画家　やめてくれ。絵は俺の命なんだぞ。
ねずみ　じゃあ歯は私のなんだ。私のなんなんだ。
画家　ああ、なんてことだ。
ソーセージ　もうよせ。

ソーセージはねずみから絵を奪う。
画家は絵をソーセージからひったくり、胸に抱えて泣く。

画家　なんて日だ。もうだめだ。もう描ける気がしない。
ソーセージ　絵の一枚くらい。
画家　なんて言い草だ。そんな気持ちでモデルをやってきたのか。
ソーセージ　そういうわけじゃ。
画家　お前はクビだ。

画家は絵を抱えて泣きながら、戸を開けて出て行く。

ねずみ　すまないと思っている。
ソーセージ　いや。これからどうする？
ねずみ　これからか。
ソーセージ　これからだ。
ねずみ　ことりはいつ帰ってくるんだろう。

戸を叩く音。

ソーセージ　噂をすればだ。

戸を開けると、資産家が立っている。

ねずみ　来てくれたの。（ソーセージに）私のお客なの。
資産家　勘違いするな。来月からここの家賃を値上げすることにした。
ねずみ　え？
ソーセージ　またか。どういうことだ、あの豆は先月も家賃をあげたばっかりじゃないか。
資産家　前の大家のことは知らないな。
ねずみ　前の？
資産家　ああ。私はそら豆からこの家を買ったんだ。ここは一等地だからな。
ソーセージ　ねずみの住処だと知って買ったな。
資産家　今となってはどうでもいい話だ。新しい契約書だ。サインを。
ソーセージ　読めるか？
ねずみ　（契約書を一瞥して）同居人が帰ってくるまで待ってくれませんか。
資産家　サインするか出て行くか、選ぶんだな。

ねずみとソーセージは顔を見合わせる。

ソーセージ　字が書けない。
資産家　まだそんなやつがいたとはな。似顔絵でいい。
ソーセージ　似顔絵でいいのか。
資産家　似顔絵でいい。

ソーセージは契約書にソーセージの似顔絵を描く。

資産家　それでは契約に従って、前金をもらおうか。
ソーセージ　なん、だと。
ねずみ　それじゃ詐欺だ。
資産家　契約書に書いてある。４万だ。

ねずみはテーブルの金を資産家に叩きつけるように渡す。

ねずみ　これで満足か。
資産家　まだ私の金が私に戻ってきたに過ぎん。支払いが遅れたら、出て行ってもらうぞ。
こんな汚い部屋、すぐにでも改装したいところだ。

資産家が戸を開けると、雀がいる。

資産家　なんだ。
雀　いえ。
資産家　邪魔をする気か。
雀　いえいえ。

資産家は去る。

ねずみ　もうおしまいだ。
ソーセージ　金くらいで、なんだ。
ねずみ　私たちは金も職もないんだぞ。
ソーセージ　なんとかなるさ。
雀　あの、ことりさんはいますか。
ソーセージ　いいや。
ねずみ　そうだ、ことり。この肝心な時になんでいないんだ。
ソーセージ　ことりがいればな。なにか考えがあるかもしれない。
雀　いつごろお戻りになるでしょうか。
ソーセージ　わからない。
ねずみ　わからないぞ。ことりが帰って来るのかどうか、あてに出来ない。
ソーセージ　犬に食われたとでも言うのか。
ねずみ　よそでもっと良い暮らしをしてるかも。
雀　あの、私のこと覚えていらっしゃいますか。
ソーセージ　誰だ。
雀　私です。いつかあなたに追いかけられた。
ねずみ　ああ、ことりをたぶらかした雀だ。
ソーセージ　ああ。
雀　ああ、まだ許してもらえてないんですね。
ソーセージ　当たり前だ。そもそもお前のせいでこんなことになってるんだぞ。

ソーセージは雀に掴みかかり、壁に押し付ける。

雀　どうも、すみません。
ねずみ　よせ。
ソーセージ　なんの用だ。
雀　いえ、あの。ことりさんがいないようでしたら、私ここに住んでもいいですか。
ソーセージ　どうしてそうなる。
雀　私も鳥ですから、代わりになるんじゃないかと。
ソーセージ　どう思う？
雀　読み書きもできますし。
ねずみ　鳥には違いない。家賃は折半だ。
雀　よかった。アパートを追い出されて困っていたんです。
ソーセージ　他に行くところだってあったろうに。
雀　行くとこなんて。友だちはみんなよそに行きましたよ。ここは人間ばっかり。

ねずみ　まったくだ。
雀　すぐに仕事を見つけますから。明日、面接があるんです。
ソーセージ　決まりだな。
雀　あの、私。あのときは本当にごめんなさい。

雀とねずみとソーセージは握手を交わす。
それを窓から、ことりが覗いている。

ことり　なんてことだ。

ことりの手から薪がこぼれ落ちる。

ソーセージ　ちょっと出るよ。
ねずみ　どこに行くんだ。
ソーセージ　あいつに謝ってくる。もう一度モデルに使ってくれるかって。
ねずみ　そうか。
ソーセージ　君は悪くない。なにも。
ねずみ　うん。
ソーセージ　そうだ。その意気だ。
ねずみ　うん。
ソーセージ　うん。

ソーセージは画家の家に行く。
画家は裸で、ことりとベッドを共にしている。
長い沈黙。

ソーセージ　え？
画家　え？
ソーセージ　そっちじゃなくて……え？
ことり　……。
ソーセージ　なにしてる。
画家　わかるだろ？
ソーセージ　え？　いつから。いつからいるんだ。
画家　さっきだ。
ソーセージ　……。
画家　こういうことはよくある。
ソーセージ　よくあるから、なんだ。
画家　よせよ。大人同士だ。
ソーセージ　……帰るぞ。
ことり　私はここにいる。
ソーセージ　え？
ことり　ここに住む。
ソーセージ　馬鹿な。
画家　俺はいいぜ。
ソーセージ　……。
画家　このうつくしい羽を撫でていると、心が落ち着く。
ことり　……。
画家　じきに創作意欲も湧くだろう。
ソーセージ　……。
画家　それで、なにしに来たんだ？

ソーセージは黙って帰宅する。

ねずみ　どうだった？
ソーセージ　ことりがいた。
ねずみ　どういうことだ。

ソーセージは台所から包丁を取り出す。

ねずみ　おい。それをどうするんだ。

戸を叩く音。開けると、警官が立っている。

ねずみ　なにか。
警官　ソーセージはいるか。
ソーセージ　なんだ。
警官　殺人容疑で逮捕する。
ねずみ　ソーセージが。ばかな。
警官　同居人か。弁護士を雇うんだな。（ソーセージに）君の絵を持ってる。残念だよ。
ソーセージ　……。

警官はソーセージに手錠をかける。

ねずみ　ソーセージ。

ソーセージは悲しそうな目でねずみを見る。
警官とソーセージは出て行く。

雀　私は、その。

雀は出て行く。
ねずみはひとり、立ち尽くしている。
ねずみは画家の家で、ことりに会う。ことりは画家とベッドにいる。

ねずみ　戻ってきてくれないか。
ことり　……。
画家　まさか、あいつが人殺しを？
ねずみ　家賃のこともあるが、とてもひとりじゃいられない。
画家　そんなとこ、戻る必要ないよ。
ねずみ　黙っててくれないか。
画家　俺の恋人だ。
ねずみ　かじるぞ。
画家　また絵か。それとも恋人か。
ねずみ　お前だ。
画家　……。
ねずみ　考えてみてくれ。
ことり　鳥がいたろ。別の鳥が。
ねずみ　ほんの短い間だ。もういない。
ことり　……。

ことりは起き上がって服を着る。

画家　待て。愛してないのか。

ことりは画家を抱きしめて、ねずみと向き合う。

ねずみ　帰るのか。
ことり　うん。
ねずみ　ソーセージはもういない。
ことり　うん。
ねずみ　これからどうする。
ことり　ソーセージの代わりはいない。
ねずみ　ああ。もうおしまいだな。
ことり　考えよう。これからのことを。

ねずみとことりが帰宅すると、トランクの上にソーセージが腰かけている。

ことり　ソーセージ。
ねずみ　もう出所したのか。
ソーセージ妹　勝手に入ってごめんなさい。姉がお世話になってます。
ことり　姉？
ソーセージ妹　はい。私、ソーセージの妹です。

ねずみとことり、顔を見合わせる。
戸を叩く音。

ねずみ　妹？　そっくりだ。
ソーセージ妹　ソーセージですから。
ことり　名前は？
ソーセージ妹　ソーセージです。
ことり　名前もそっくりだ。
ソーセージ妹　ソーセージですから。

戸を叩く音。

ソーセージ妹　姉を訪ねて来たんです。ずっと南の方から。
ことり　南？　あの険しい山を越えたのか。
ねずみ　南というとアルプスか。
ことり　それほどでもないが、越えられない山があったはずだ。

戸を叩く音。
ことりが戸を開けると旅人が立っている。

旅人　これ、以前お借りしたものです。

旅人はことりにシャベルを渡す。

ねずみ　ああ。あの時の。
旅人　トイレをお借りしてもいいですか。
ことり　いま、ちょっと。

旅人　じゃあ、待ってますので。

ことりは戸を閉める。

ソーセージ妹　トンネルが出来たんですよ。
ことり　トンネル？
ねずみ　従弟が工事をしてると言っていた。もぐらと協力して山に大きな穴を開けるとか。
ソーセージ妹　ええ。私、都会に出て来たかったんです。それで。
ことり　都会？

戸を叩く音。
ことりが戸を開けると旅人が息も絶え絶えに、なんとか立っている。
ことりが旅人を招き入れると、旅人は脇目もふらずトイレに進むが、あいにくねずみが先に入ってしまった。

旅人　北と南を繋ぐ道が出来たので、ここはこれからずっと大きな街になるんですよ。
ことり　また家賃があがるな。
旅人　あなた南から？　僕は北から。車で来たの？
ソーセージ妹　ええ。バスで。
旅人　あっちはすごい渋滞だったでしょう。やあ、こっちもひどかった。
ソーセージ妹　ええ。あの。

ねずみが戻ってくると、旅人は入れ替わるようにトイレに向かう。

ソーセージ妹　あの、姉は？

ことりとねずみは沈黙するが、旅人はトイレの中から話を続ける。

旅人の声　とにかく沢山の人が移動してますからね。南北を繋ぐ道には高速道路がつくられ、より早くより多くの人と物が行き交ってます。道は広がって、長くなって、どこまでも枝分かれして行きながら、あらゆる場所とこの町は繋がってるんですよ。もうここは町っていうより都市ですね。古きものは新しきものに取って代わり、終わりなき発展を謳歌しているってわけです。これからもっともっと人は移動しますよ。そのエネルギーでなんか出来たらいいんですけどね。

旅人はタオルで手を拭きながら、トイレから戻ってくる。

旅人　例えば、道を歩いたらローラーがまわって発電するとか。いや、そのくらい人がいっぱいいるってことですよ。もう宿なんか全然空きがなくって。
ソーセージ妹　そうなんですか？　どうしましょう。
ことり　泊まっていけばいい。
ソーセージ妹　いいんですか。お邪魔では？
ねずみ　とんでもない。
ことり　大歓迎だよ。
ソーセージ妹　すみません。
旅人　わあ。いいなあ。それは良かった。いいなあ。

ことりとねずみは旅人を見る。
旅人は出て行く。
グリム兄弟が家の外にいる。

グリム兄弟　やあ。ヴィルヘルム・グリムだ。（ヤーコプを見て）兄は。（視線をそらし）ソーセージが捕まってしまって、どうしようかと思ったが、そのまま書き続けることにした。いや正直に言おう。何度か黙って書き直した。しかしどうもうまく行かない。ひどいときは、また全員死んでしまった。そのうち私は生きていればいいかと思うようになった。生きていれば、この先どうなるか、まだわからない。陳腐だが、その通りだ。ソーセージは刑務所に収監され、ソーセージの妹はねずみとことりと共に暮らすことになった。それからソーセージの妹はファッション雑誌の読者モデルとして活動している。ことりはコーヒーショップを辞め、新しくできたスタバというコーヒーショップで働いている。ねずみは酒場で歌うのをやめて市役所勤めだ。時間は一定の速度で進んでいるわけではないようだ。時には、あっという間に進んでしまう。

グリム兄弟が話している間に、部屋の外の様子が変わる。
自動販売機が設置され、電信柱が立ち、壁には選挙ポスターが貼られている。
市長選挙のそのポスターには、資産家の笑顔が張り付いている。
新しい生活の様子。
春。
部屋の中には、ことりとねずみとソーセージ妹がいる。
全員、抹茶クリームフラペチーノを飲んでいる。
子供がやってくる。

子供　（窓から中を覗いて）わあ。ソーセージだ。ソーセージだ。

ソーセージ妹は子供に手を振ると、子供は照れたように、走り去る。

ねずみ　人気者だな。
ソーセージ妹　ただの読者モデルですよ。
ことり　雑誌の表紙であなたが着た服は、次の日には売り切れる。
ソーセージ妹　でも油が付いて返品できないって、スタイリストさんが困ってました。
ねずみ　そんなのささいな問題だ。
ことり　気になるなら、料理でもしたら？　油が抜けるってあいつが。
ねずみ　あいつの話はよせ。
ソーセージ妹　来月から、お料理番組やるんですよ。
ねずみ　君がか。
ソーセージ妹　ええ。『ソーセージの簡単3分お料理』って、国営放送で。
ねずみ　テレビか。どんどん、手が届かない所に行きそうだ。
ソーセージ妹　そんなこと。
ことり　あいつも、ある意味手が届かない。
ねずみ　あいつの話はよせ。
ソーセージ妹　あの、たまには一緒に行きませんか。面会。
ねずみ　私たちには、君がいる。
ソーセージ妹　姉さんには、あなたがたしかいないんです。
ねずみ　市役所で噂になったらどうする。公務員はクリーンでなくちゃいけない。
ことり　そんなこと、気にするんだ。
ねずみ　また歯も削った。清潔感が大事だからな。
ことり　ただの事務員のくせに。
ねずみ　ただのウェイトレスには関係ないことで、羨ましいね。
ソーセージ妹　ごめんなさい。勝手なことを言ってしまって。
ねずみ　君は悪くない。
ことり　そうだよ。

ソーセージ妹　いいえ。姉さんの罪は私の罪です。
ねずみ　そういうことじゃない。
ソーセージ妹　いいえ。そういうことじゃなくじゃなくじゃないんです。
ことり　なくじゃなくじゃ……？
ソーセージ妹　姉さんと私は、生まれた時から繋がれた双生児ですもの。私のものは姉さんのもの、姉さんのものは私のもの。

ソーセージ妹は、ことりとねずみの手を取る。

ソーセージ妹　姉さんの友だちは、私の友だちです。
ことり　……こんなふうに確かめたことなんてなかった。
ねずみ　……ああ。
ソーセージ妹　だから、ごめんなさい。
ねずみ　え？
ソーセージ妹　私が何度でも謝ります。いつか姉さんを許してください。
ねずみ　……やっぱり、あいつとは違うよ、君は。
ことり　……そうだな。なんというか、ソーセージができてる。だから人気者になるんだ。
ソーセージ妹　そんなこと。ただの流行ですよ、いつか過ぎ去るだけの。
グリム兄弟　そう。時はあっという間に過ぎ去る。人間たちは経済で社会を回し、社会は転がりつづけて山を砕き、木という木を切り倒し、森を平らにしつづけた。そして、私たちは居場所を失っていった。

秋。
部屋にはデザイナーが加わっている。同じく抹茶クリームフラペチーノを飲んでいる。
子供がやってくる。

子供　やーい、グリムのお化け屋敷。

子供が部屋の外壁に卵を投げつけて去る。グリム兄弟はそれを追って去る。
デザイナーがカーテンを閉じると部屋が暗くなる。

ことり　開けて。暗いのは嫌。
デザイナー　電気をつければいい。
ことり　止まってるの。

デザイナーは窓を開ける。

ことり　ねえ、どうしてもだめなの。
デザイナー　上から圧力がかかってね。
ソーセージ妹　いいんです。私がモデルだなんて、やっぱり無理だったんです。
ねずみ　なに言ってるんだ。君は１０代のカリスマだろう。
ソーセージ妹　ただの読者モデルですよ。
ことり　雑誌の表紙であなたが着た服は、次の日には売り切れる。
ソーセージ妹　でも油が付いて返品できないって、スタイリストさんが困ってました。
デザイナー　そこが問題じゃない。
ことり　じゃあなによ。
デザイナー　何故ソーセージが服を着てるんだという根本的なことが問題になってるんだ。
ことり　差別よ。
デザイナー　確かにそうだが、読者の苦情が多くてね。どうしようもない。
ことり　あなたハクホウ堂なんでしょ。

デザイナー　ハクホウ堂だからだ。業界最大手に就職したからこそ、表現に自由なんかない。
ことり　昔のあなたが良かった。ソーセージの絵を描いてた頃の。
デザイナー　あれはよく売れたな。
ことり　お金のことばっかり。
ねずみ　おい。
ことり　なに。
ねずみ　その喋り方よせよ。
ことり　なにか変？
デザイナー　こういう時代だ。ソーセージに職があるのも時代のせいだし、ソーセージが職にあぶれるのも時代のせいだ。僕のせいじゃない。
ソーセージ妹　いえ、本当によくしてくださって、感謝してます。
ねずみ　鼠にも時代は厳しい。市役所じゃ鼠駆除活動を奨励した。それで私はクビだ。
デザイナー　清潔感が大事だからな、都会的なイメージのためには。
ねずみ　清潔感には気をつけていた。
ソーセージ妹　せっかく安定した職業だったのに。
ねずみ　職業は安定していても、私たちが不安定なんだ。
ソーセージ妹　本当に。どうしましょう。
ことり　家賃も値上がりする一方だしね。
デザイナー　どのみち、ことりの収入だけじゃ先はない。
ねずみ　ことりはよくクビにならないな。鳥がコーヒー売るのは問題ないのか。
ことり　あそこは外国資本だから、鳥に寛容なの。
デザイナー　鳥は可愛いからだろ。
ねずみ　なんだと。
デザイナー　誤解するな。鳥を愛玩する人間は多いって話だ。
ねずみ　お前もな。
デザイナー　一緒にするな。僕は人として扱っている。
ことり　私は鳥よ。
デザイナー　茶化すな。
ことり　茶化してない。鳥は鳥のままで、鼠は鼠のままで、ソーセージはソーセージのままで、どうしていられないのかしら。
ソーセージ妹　ソーセージのままだと食べられちゃいますから……。
ことり　それもそうね……。

戸を叩く音。
デザイナーが戸を開けると、グリム兄弟が入ってくる。

グリム兄弟　薪は取って来たか。水を汲んで、テーブルをきちんと整えろ。
ことり　グリムさん。
ねずみ　もうそんな時代じゃない。
グリム兄弟　時代など関係あるか。お前たちは時代を越える存在なんだ。お前たちは昔話の登場人物なんだから、それらしくなきゃいかん。流行だなんだと、そういうものに左右されてはいかん。大衆はそういう確固としたものを求めている。
デザイナー　しかし抹茶クリームフラペチーノはおいしい。
グリム兄弟　それもいつか廃れる。お前は誰だ。
デザイナー　大衆に長く愛される定番商品にだってなれる。
グリム兄弟　おい、この定番商品くんは４人目の住人か。
ことり　ここに住んでるわけじゃ。
グリム兄弟　ならいい。人間なんかろくなもんじゃない。
ねずみ　その帽子は？

グリム兄弟は子供が被っていた帽子を握りしめている。

グリム兄弟　ああ、これか。（じっと帽子を見るがそれには答えず）原点回帰だ。
デザイナー　原点回帰？
グリム兄弟　そう、原点回帰して、私たちは子供たちのために物語を進めていかねばならない。なんせ私は「子供と家庭のための昔話集」の著者であり、君たちはその登場人物なんだからな。
ねずみ　それで、どうしろと。
グリム兄弟　ここをアミューズメント・テーマパークにする。昔話の生活を体験できる施設だ。薪を拾ったり、井戸から水を汲んで、本物の火をつけて鍋を煮るんだ。もちろんそれだけじゃない。グッズを作って売る。料理も出す。ソーセージが料理をして、ことりがそれを運ぶ。フロアではねずみが歌えばいい。これまでの経験を活かした役割だろう。最終的にはみんなで踊れ。
ねずみ　地味なのか派手なのか。
ことり　そんなの無茶ですよ。
デザイナー　いや案外いけるかもしれない。
ねずみ・ことり　本気か（なの）？
デザイナー　観光だよ。この街はハブ都市として発展してきたが、この街自体に目立った観光資源がない。子供が興味を持つなら、財布を握る親が動く。
グリム兄弟　そうだ。子供が教えてくれた。私たちがこれからどうすればいいのか。

グリム兄弟は子供の帽子を握りしめている。みな、それに目をやるが、なにも言わない。

ねずみ　そんなにうまくいくもんか。
ことり　誰が私たちの生活を体験したいっていうの。私たちは抜け出したいのに。
ねずみ　わざわざ金を払って、鼠を見たいやつなんていないだろ。ははっ。
デザイナー　しかしここには人気者がいる。（と、ソーセージ妹を指す）
ソーセージ妹　私ですか？
デザイナー　子供の支持は厚い。
ソーセージ妹　でも、もうファッション誌には出られないんですよ。人気だって下がります。
デザイナー　今なら雑誌から活躍の場を変えたという見方だって出来る。
ソーセージ妹　落ち目のタレントが舞台に出るという悪しきイメージに乗っかるだけでは。
デザイナー　まさに悪しきイメージだ。舞台に出たいから出るんだ。やるか、やらないのか。
ソーセージ妹　やります。
ねずみ・ことり　やるのか。
グリム兄弟　決まりだな。今日からここは「グリムランド」だ。
ことり　グリムランド。
グリム兄弟　グリムランドだ。
ねずみ　ははっ。地味だな。なんであんたの名前をつけるんだ。
グリム兄弟　グリム童話だからな。
デザイナー　待って。少し権利的な問題で不安がある。
グリム兄弟　なにが問題だ。
ねずみ　私の名前でもいいじゃないか。ネズミーランドだ。
デザイナー　なおまずい。これでどうだろう、「鼠と小鳥とソーセージの家」。
グリム兄弟　長い。だが悪くない。
ことり　私たちの家だしね。
ねずみ　そうだ。私たちの家だ。そういうことを言いたかった。
デザイナー　よし、企画書を書こう。それからスポンサーを探して資金を調達する。これは大きな計画になるぞ。市長も巻き込むことになるだろう。それは覚悟しておいてくれ。

デザイナーは戸を開けて出て行く。

ねずみ　あいつか。
グリム兄弟　なんだ。
ねずみ　市役所をクビになったのもあいつのせいだ。これ以上、昔の男に邪魔されたくない。
グリム兄弟　ああ。あいつ市長になったのか。

ねずみは窓の外、ポスターを指さす。

ねずみ　隣の奴が党のシンパなんだ。何度はがしたって、すぐ新しいのを貼るんだ。
ことり　仕方ないじゃない、隣のものなんだから。
ねずみ　最初の大家だった、そら豆が自殺したそうじゃないか。あれだって市長のせいだ。
ことり　考え過ぎよ。
ねずみ　都会では自殺する豆がいる。でも街は見殺しだ。他人事じゃない。いつ私たちが見殺しにされるか、わかったもんじゃないからな。
ことり　考え過ぎだって。
ねずみ　ことりはもっと考えてたろ。私たちの生活を。
ことり　だからもう疲れちゃったのよ。
ねずみ　……。
ソーセージ妹　体を動かした方がいいときだってありますよ。なにも考えずに。
グリム兄弟　そうだ。さあ準備するんだ。
ソーセージ妹　準備って、なにをするんですか。
グリム兄弟　少しは考えろ。薪を拾い、水を汲んで、料理をするんだ。
ねずみ　つまり、昔のようにか。
ことり　どうせ、ガスも電気も止まってるんだ。
ねずみ　水道もな。
ソーセージ妹　困りましたね。森も川もこの辺りには。
ねずみ　でかい公園がある。そこの蛇口をひねれば水はじゃぶじゃぶ出るさ。
ことり　並木道の枝を拾えばいいか。
グリム兄弟　そうだ、なにも変わらない。
ことり　変わりましたよ。なにもかも。

ねずみとことりは戸を開けて出て行く。

ソーセージ妹　あら、私はなにをすれば？
グリム兄弟　鍋で煮込まれる準備でもしてろ。
ソーセージ妹　煮込まれる？
グリム兄弟　そうすればスープのダシになるだろ。
ソーセージ妹　ああ、そういう。それは油が抜けるわけだ。

ソーセージ妹は大なべを準備して、服を脱ぎ始める。

グリム兄弟　なにを今更。
ソーセージ妹　あの。はじめまして、ですよね？
グリム兄弟　ああ、妹だったな。
ソーセージ妹　はい。ソーセージです。まさかお会いできるとは。
グリム兄弟　ああ。
ソーセージ妹　あの。
グリム兄弟　なんだ。
ソーセージ妹　出て行ってもらえます？

グリム兄弟　ああ。
ソーセージ妹　いくらあなたが幽霊でも、ねえ？
グリム兄弟　ああ。そうだな。

グリム兄弟は戸を開けて出て行く。
ソーセージ妹は囚人服に着替えて、ソーセージになる。
するとここは刑務所の面会室になる。
刑務官に連れられたグリム兄弟が、面会にやってきた。

グリム兄弟　元気そうだな。
ソーセージ　そうでもないです。
グリム兄弟　いじめられてないか？
ソーセージ　歯医者を殺したから、ここでは人気者ですよ。みんな歯医者が嫌いだ。
グリム兄弟　歯医者のせいじゃない。
ソーセージ　わかってます。なんでここに？
グリム兄弟　グリムランドのことだ。
ソーセージ　グリムランド？
グリム兄弟　違った。鼠と小鳥とソーセージの家だ。
ソーセージ　なんの話ですか。
グリム兄弟　なにも聞いてないのか？
ソーセージ　妹はたまに来てくれましたけど、最近は誰も。
グリム兄弟　忙しいのだろう。気を悪くするな。ニュースは見ないのか。
ソーセージ　絵本をね、見るんです。もちろん字は読めません。覚えるのも面倒だ。だから
ずっと絵を眺めてるだけなんですけど。昔話をね、よく見るんです。シンデレラや赤ずきん、
ラプンツェルなんかをね。でも、鼠と小鳥とソーセージの話はどこにもない。
グリム兄弟　まだ終わってないからな。
ソーセージ　まだ終わってないんですね。私はもうとっくに終わったのかと思ってました。
グリム兄弟　これからだ。見ろ。

グリム兄弟はソーセージに新聞を渡す。

ソーセージ　読めないって言ってるでしょ。
グリム兄弟　写真を見ろ。
ソーセージ　なんです。
グリム兄弟　ことりとねずみと、お前の妹が、やったんだ。親子連れで毎日賑わっている。
ソーセージ　これは。
グリム兄弟　昔のままの生活をしながら新しい生活をしている。まったく素晴らしい。
ソーセージ　私たちの家。
グリム兄弟　そうだ。あとはお前だけだ。

ソーセージはグリム兄弟を見る。

グリム兄弟　お前が戻ってくれれば、完璧だ。
ソーセージ　まだ２０年はかかる。
グリム兄弟　いつまでだって待つ。お前たちがしあわせになって、お話が終わるまで。
ソーセージ　みんな待っててくれるでしょうか。

刑務官に促されて、グリム兄弟は去る。
ソーセージはじっと身動きせず新聞の写真を眺めていたが、新聞の中にヤスリが入っている
のに気づき、意を決して脱獄する。

警報が鳴り響く中、ソーセージは脱獄に成功した。
ソーセージは家の外までやってくるが、子供に見つかってしまう。

子供　あ。ソーセージだ。
ソーセージ　静かにしろ。
子供　ソーセージだ。ソーセージだ。ねえ写真撮って。

子供はスマホをソーセージに向ける。

ソーセージ　なんだそれは。おい、やめろ。
子供　ねえハグして。ハグしたところを写真に撮って。
ソーセージ　やめろ。なんだお前は。

ソーセージは思わず子供の首を絞める。

子供　また私を殺すんですか。
ソーセージ　うわあああああ。
子供　うわあああああああん。

子供は泣きながら逃げ出す。
呆然としたソーセージだが、子供の後を追う。
しばらくして戻って来ると、ソーセージの手には子供の被っていた帽子が握られている。
ソーセージはふらふらと、部屋の中に入る。
ねずみが戸を開けて入ってくる。

ねずみ　ここにいたのか。これからダンスショーだぞ。
ソーセージ　ねずみ。
ねずみ　なあ。これはことりが言うんだが、まだ腰のキレが甘いって。お前、ソーセージか。
ソーセージ　すまない。
ねずみ　なんでここにいる。
ソーセージ　こんなつもりじゃなかったんだ。
ねずみ　お前、ここにいてもいいのか。
ソーセージ　私はここにいていいのか。
ねずみ　私が聞いてるんだ。

戸が開いて、ことりとステージ衣装を着たソーセージ妹が入ってくる。

ソーセージ妹　……！
ソーセージ　ソーセージ。
ことり　ソーセージ。

ことりがソーセージに近寄るが、ソーセージはそれを躱すように戸へ向かう。
ソーセージはソーセージ妹を突き飛ばすようにして、逃げ出す。

ねずみ　ソーセージ。

溶暗。
明るくなると、部屋の中にねずみとことりとグリム兄弟がいる。
部屋の外では戸を叩く音や、怒鳴り声、壁になにかがぶつかる音で騒がしい。

グリム兄弟　すまない。私のせいだ。
ことり　グリムさん。
ねずみ　脱獄しろと言ったのか。
グリム兄弟　いや。言いはしなかった。だが結果的にそうなった。
ことり　ソーセージは縛り首になったそうですね。
グリム兄弟　ああ。市役所の広場で吊るされた。大勢の人間が見ている前でな。
ことり　まるで魔女狩りだ。
ねずみ　いつの時代だ。クリーンな都市が聞いて呆れる。
グリム兄弟　奴らは子供が死んだと思ったんだ。実際は怪我しただけだったが。
ことり　なんですか。
グリム兄弟　ん？
ねずみ　仕方ないって言ってるように聞こえるけど。
グリム兄弟　すまない。私のせいだ。
ことり　グリムさん。
ねずみ　もういいだろう。書き直してくれ。
ことり　ええ。こうなったら仕方ありませんよ。
グリム兄弟　ああ、そうだな。

グリム兄弟は沈黙して、なにもする様子がない。

ことり　グリムさん？

戸を叩く音。戸が開いて、旅人が入ってくる。

旅人　いやあ、えらい人だかりですね。
ねずみ　どうやって入った。
旅人　だって3回ノックしたでしょう。聞こえませんでした？
ねずみ　鍵をかけてある。
旅人　だから、3回ノックしたからですって。これ、前トイレ借りたときのタオル。

旅人はタオルを差し出す。

ことり　これだけのために。
旅人　ちゃんと洗ってますから。それで、またトイレ貸してもらえませんか？
ねずみ　今、ソーセージが。
旅人　ソーセージが？　え、なにを出すんですか。
ことり　セクハラだぞ。
ねずみ　セクハラなのか。
ことり　なにかハラだぞ。
旅人　いっけね。気をつけます。（グリム兄弟に）年取るとね、こういうとこあるから。
グリム兄弟　一緒にするな。
ねずみ　話を戻そう。書き直してくれと言ったんだ。なにが問題だ？
旅人　書き直すって、なんですか。
ねずみ　こいつ、グリムだろ。
旅人　ええ、知ってますよ。
ことり　私たちのことを記録して、書き残すのが役目なの。
旅人　ええ、知ってます。グリム童話ですよね。
ねずみ　だから書き直してくれれば、元通りだろ。
旅人　でもグリムさんはとっくに死んでますから、書き直せないでしょう。
ねずみ　え？

ことり　書き直せない？
旅人　グリム童話は、第7版だから、7回書き換えたんですよね。その後、死んだでしょ？
ソーセージ妹がトイレから出てくる。
旅人は会釈をしつつ、いそいそとトイレに入っていく。

ことり　7回も。いつ書き換えたんですか。
ねずみ　それより、いつから死んでるんだ。
ソーセージ妹　はじめて会った時には死んでましたよね？
グリム兄弟　ああ。
ねずみ　死んでるのに、いるのか。
グリム兄弟　なんだ。
ねずみ　つまり、死んでいるのに、いるのか。
ことり　こういうことです。死んでいるのに、いるんですか？
ソーセージ妹　童話ですから、幽霊くらいいてもおかしくないですよ。
グリム兄弟　そうだ。今となっては私も登場人物のひとりに過ぎない。
ねずみ　それなら、じゃあ誰が書いているんだ。
グリム兄弟　誰も書いてなどいない。人の人生を書くなんてことは、誰にもできない。せいぜい、記録するだけだ。
ことり　誰が記録しているんだ。（ヤーコプに）お前か。
グリム兄弟　よせ。兄さんも死んでる。
ことり　じゃあ、誰だ。
ねずみ　じゃあ、これからどうするんだ。
ソーセージ妹　すっかり取り囲まれてしまいましたもんね。
グリム兄弟　私の名を取ってグリム排斥運動とは、嘆かわしい。
ねずみ　なんだそれは。
ソーセージ妹　童話の登場人物は全て、国外退去させようって人たちの活動ですね。
グリム兄弟　ああ。このままだと実力行使も辞さないだろうな。
ねずみ　だろうなじゃない。追い出されて、どこに行くんだ。
グリム兄弟　どこか遠くの、深い森の奥で静かに暮らすしかない。
ねずみ　これまでだって静かに暮らしてきた。騒がしいのは回りばっかりだ。
ことり　森なんてない。あるのはここだけだ。
ソーセージ妹　もう、これでおしまいかもしれませんね。

トイレから旅人が出てくる。

旅人　どうしたんですか、みなさん。この世の終わりみたいな顔をして。
ねずみ　もうこのお話も終わりだからさ。
旅人　そうですか。終わりよければ全てよしって言いますからね。人はどうも口から食べる事ばっかり考えますけど、ケツからそれが出て行って、ようやく食べ物の一生は終わりなんですよ。ケツから出るものをね、まあ平たく言うとうんこをね、どうやって処理するか、いかに快適にケツを拭くのかってのが、ことのほか大事なんですね。
グリム兄弟　それがお前の哲学か。
旅人　あちこち旅する中で学んだことです。ケツ学ですね。
ねずみ　つまりそれは、どういうことだろう？
ソーセージ妹　つまりこの人は、私たちがうんこだと言いたいんですね？
ねずみ　え？
ソーセージ妹　この家がお腹の中で、私たちが食べ物なんです。私たちの人生は終わって、うんことして外に出ていく。あの戸が肛門ですね。あそこから、うんこが出て行く。
旅人　違いますよ。なんですか、うんこって。

ソーセージ妹　あなたが言ったんじゃないですか。
旅人　うんこは大事ですよ。でもね、うんこをする環境を整えるのが大事って話をしただけで、なにか大した例え話をしたわけじゃないんです。やだなあ、そういうの。人の話はいつもなにかしらの教訓だとか、ありがたい意味があると思ってるんですか？
ねずみ　待て。静かに。
旅人　なんですか。
ねずみ　静かに……ほら、静かじゃないか？
旅人　それはだって、静かにしたんですから。
ことり　外だ。
ねずみ　そうだ。外が静かなんだ。
ソーセージ妹　なんでこんなに静かなんでしょうね。
グリム兄弟　いよいよか。
旅人　え、いよいよって？　え？

戸を叩く音。
沈黙。
戸を叩く音。
沈黙。
戸を叩く音。
沈黙。
戸がゆっくり開くと、そこに弁護士が立っている。

ことり　誰。
弁護士　わたくし、こういう者です。

弁護士は名刺を投げる。

ことり　グリム排斥運動反対派……弁護士？
弁護士　さようです。わたくし共は童話的人類との共存・共生を掲げて活動しております。この度、お宅の、つまり、ねずみさんとことりさんとソーセージさんのおうちが暴徒による襲撃を受けていると聞き、駆け付けた次第でございます。幸い、ここはソーセージさんのご活躍によって危機を脱したわけでございますが、ああこれはもう一人のソーセージさんのことです。ご説明しますと、もう一人のソーセージさんは広場で首を吊られておりましたが、まああれです、ソーセージはそもそも吊るされたところで平気なんですね、あっと言う間に逃げ出しまして、この家までやってきたわけです。ところがここでも大勢の人だかりがありまして、ソーセージさんは実力行使で撃退したと、こういうわけで。具体的には子供を人質に取って、脅して帰らせようとしたのですが、警官隊の突入によってひどい怪我を負ってしまったのです。あわや逮捕というところをですね、我々が引き取りました。お察しの通り、私どもはそれだけの国際的な権力を持った組織が後ろ盾におります。それがなにかは、今はまだ語りますまい。さておき、まさに九死に一生を得たと言いますか、ソーセージさんが瀕死の状態となっておりますのが現状でございます。もちろんすでに医療スタッフが保護しておりますから、ひとまずのことはご安心いただきたく存じます。今後のことでございますが、今回の事件はソーセージさんの暴力事件ではなく、仲間を守るために自衛したといういわば英雄的行為だったとして今後の裁判を争っていく所存でございます。まことに立派な、うつくしい行為でございます。もちろんソーセージさんの過去の罪状が覆されるわけではございません。しかしこれからの未来のために、誰も殺し殺さないで済む世の中にしていくために、わたくし共は活動していく所存でありますので、どうぞ今後ともよろしくお引き立ていただきたく存じます。手短ではありますが、今日はご挨拶までとしてまた後日おめもじかかりたく存じます。失礼いたします。（一礼する）
ことり　待て。

弁護士　なんでしょう。お聴き逃しでしたら、もう一度ご説明しましょうか。
ことり　それはいい。
弁護士　ではなんでしょう。
ことり　いや、その。
ねずみ　ソーセージに会えるのか。
弁護士　ええ。名刺の裏をご覧ください。

弁護士は去る。

ソーセージ妹　あの、ちょっと、待ってください。

ソーセージ妹は弁護士を追いかけていく。
ことりたちは名刺を見る。

ことり　グリム記念病院。
ねずみ　え？
グリム兄弟　生前、多額の寄付をした。それで私たちの名前を付けたようだな。
ことり　結果的に、グリムさんに助けられたということですか？
ねずみ　偶然だろ。
旅人　終わりよければって言うでしょ。まあ僕が言ったんだけど。それじゃ。
グリム兄弟　帰るのか。
旅人　いてほしいんですか？
グリム兄弟　いいや。
旅人　でしょ。あ、トイレ貸してくれてありがとうございました。
ことり　それはいいけど。
旅人　お礼にいいこと教えてあげます。これから世の中、良くなりますよ。
ねずみ　なんでわかる。
旅人　そりゃあ僕はいろいろ見てますからね。
ねずみ　いい加減な奴だ。
旅人　いい加減なんですよ、僕は。いい加減にこれまで見て来たし、いい加減に、これからも見て行くんです。世の中の、全てのことをね。

旅人は戸を開けて去る。

ことり　まさか、お前か。

ソーセージ妹が戻ってくる。

ねずみ　さあ。ソーセージに会いに行こう。

ねずみとことりとソーセージ妹とグリム兄弟は病室でソーセージを見舞う。
医者と看護師がそれを見守っている。

ことり　ソーセージ。
ねずみ　ソーセージ。

ソーセージ妹は眠っているソーセージの手を取る。

ことり　容態はどうなんですか。
ねずみ　助かりますよね。

医者　残念ですが。
ねずみ　どういうことだ。
医者　我々もソーセージを診たことがないので、なんとも。
看護師　ソーセージはちょっと。
グリム兄弟　馬鹿な。それでもグリム記念病院か。
医者　そう言われましても。
ことり　もし、こいつに最後の時が来たら、うちに帰してください。
医者　それは、私の方からはなんとも。
ことり　返してください。
ねずみ　私たちに。
グリム兄弟　私が話をつけてくる。

グリム兄弟はことりから弁護士の名刺を受け取る。
グリム兄弟は戸を開けて去る。

春。
ソーセージは眠りつづけ、そのまま最後の時を迎えるため、部屋に帰ってきた。
それを見つめるねずみとことりとソーセージ妹。

ことり　おかえり。
ねずみ　おかえり。
ソーセージ　やあ。
ことり　ソーセージ。
ねずみ　喋ってもいいのか。
ソーセージ　煙草をくれないか。
ねずみ　煙草は。
ソーセージ　ないか。

医者がことりに煙草とライターを渡す。
ことりとねずみは、ソーセージに煙草を咥えさせ、火を点けてやる。
ソーセージの一服。

ソーセージ　ここはいい匂いがする。生活の匂いだ。

最後の吐息が紫煙となって漂う。
医者がソーセージの手を取る。
医者が時計を見て、時間を告げる。看護師が記録紙に時間を書き留める。
ことりは看護師から記録紙を奪い、破り捨てる。

ねずみ　ことり。
ことり　書くんじゃない。こいつのことを、もう書かせないぞ。

部屋は悲しみに暮れてゆく。
終幕。

【引用・参照文献】

「１８１２初版グリム童話」　グリム兄弟著／乾侑美子訳　（小学館文庫）
Risus paschalis―近世ドイツの民衆と復活祭説教における愚の意味について―　吉田孝夫（論文）
「ラヴィ・ド・ボエーム」　アキ・カウリスマキ監督（映画）

【上演記録】

星の女子さん⑬『うつくしい生活』２０１８年７月２７日（金）～２９日（日）
於：七ツ寺共同スタジオ
作・演出：渡山博崇

キャスト

グリム兄弟……二宮信也
ねずみ……まとい
ことり……伊藤文乃
ソーセージ／ソーセージ妹……岡本理沙
豆／配達員／資産家／警官／看護師……うえだしおみ
犬／配達員／画家（デザイナー）／医師……青木謙樹
雀／配達員／歯科医／子供／弁護士……中島由紀子
旅人……神谷尚吾

スタッフ

舞台監督：早馬諒
照明：平野行俊
音響：鈴木SUN
音響オペレート：神阪立人
舞台美術：星の女子さん
大道具：かすがい創造庫
小道具：ハラミナホ、鈴木イボンヌ
衣装：水原月子
衣装協力：ＰＯＮ
映像：天野順一朗
演出助手：新宮虎太朗
イラスト：カシワイ
宣伝美術：オレンヂスタ美術部
制作補佐：岡沙織、今枝千恵子、ほりべたいじゅ
制作：水原沙子